

### 3 福島第12海竜隊宮崎部隊

#### 小名浜海竜隊実在の認識

特攻ボートの聞き取り調査中の1999年3月、地元住民から戦後間もない頃、小名浜海岸の波打ち際に赤錆びた小型潜水艦が、横たわっていたとの複数の証言を得て注目していた。その後、前記生沢氏からの会誌コピーには、前記藤井氏が「本土決戦に備え、当地の三崎海岸に嵐部隊第十七突撃隊を設置し、震洋隊（爆装ボート）と海竜隊（人間魚雷）を配備していた」とし、同隊元搭乗員土田裕国氏も、小名浜基地海竜隊と騎馬戦をして楽しんだ事が記されている。その後海竜隊の情報がないまま、暗中模索中の2000年11月、前記震洋会々長上田氏より、第一七突撃隊関連の海軍機密文書の提供があつて、小名浜第12海竜隊の実在に確信をもったので、小名浜基地海竜隊調査を新聞に発表したところ、2001年8月同隊元整備隊員織田良雄氏（阿見町）と交信が可能となった。さらに2002年1月同隊元搭乗員野々宮高成氏（日高市）とも交信が可能となって、その助言と資料を戴いて小名浜第12海竜隊調査が大きく進展した。以下その要約を記す。

**部隊編成** 宮崎部隊は1945年7月25日、第十七突撃隊編入である。第12海竜隊部隊長宮崎襄中尉（部隊長付野々宮高成少尉）麾下、第1艇隊長宮崎襄中尉、第2艇隊長高松一之助中尉、第3艇隊長沢辺陽太郎少尉以下搭乗員45名。<sup>7)</sup> 部隊は1艇隊、海竜艇4隻で3艇隊12隻をもって編成された。<sup>8)</sup> 総員123名である。（宮崎部隊の名簿がないので、前記元整備隊員織田氏提供の第12海竜隊解隊総員記念写真による）、なお整備隊員と基地隊員の分別数は不明である。全搭乗員は予科練出身で水上艦艇を失った将兵を收容して、再教育訓練をし、海竜艇搭乗員に養成したので、搭乗員数45名はその「アブレ」であると同野々宮氏は証言する。

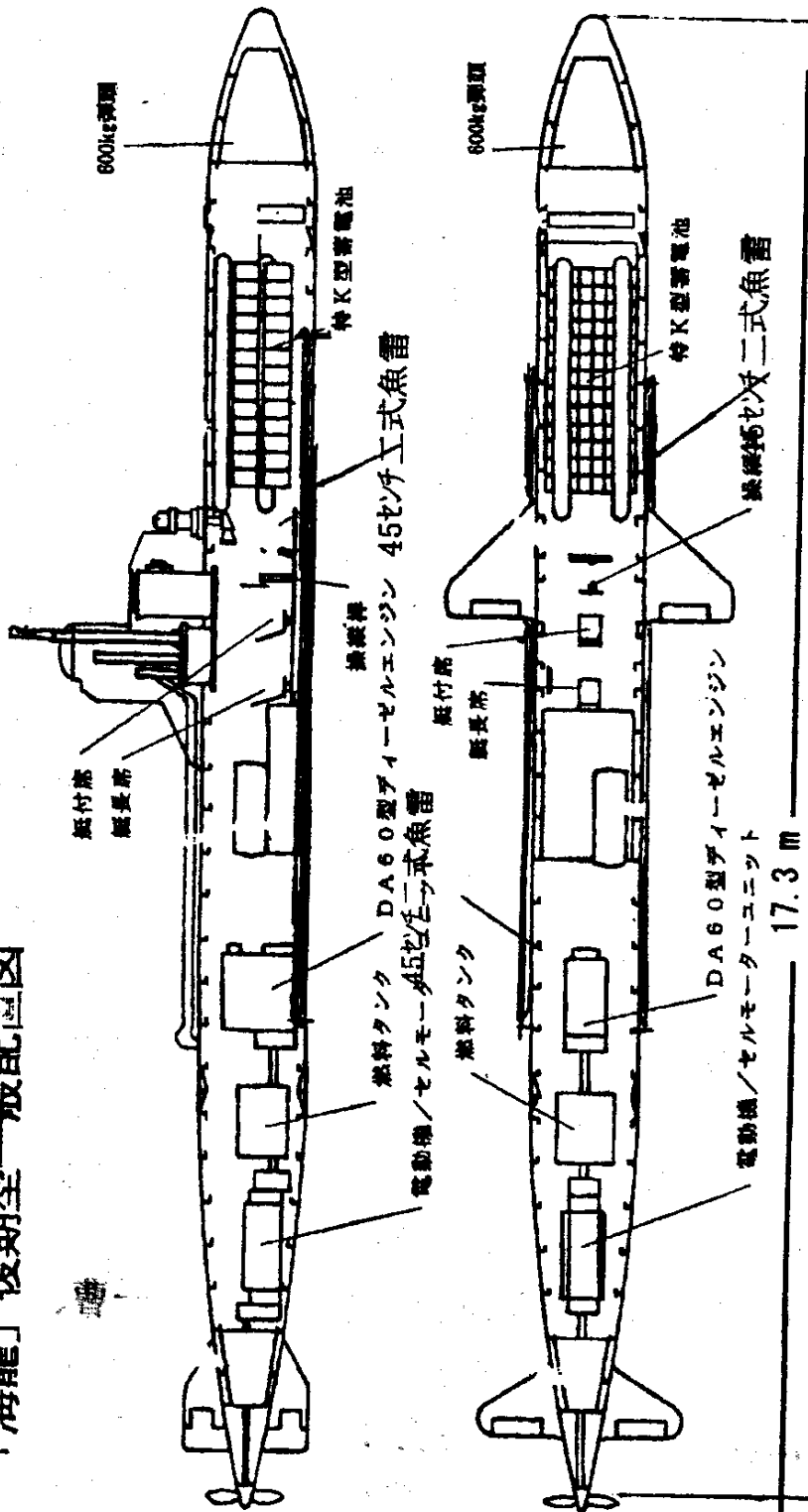
**基地進出** 軍極秘文書では1945年7月25日と記されているが、<sup>10)</sup> 同野々宮証言は、宮崎部隊の小名浜進出は小グループに分かれての進出であったとする。同氏の場合は、同7月10日第十一突撃隊に編入して、同7月25日第十七突撃隊に編成配属になった。同8月11日横須賀軍港を無蓋貨物列車二輛に海竜艇3隻を乗せて出発、同13日小名浜基地に着いた。宿舎は民家の高津家（神職）であった。前記元整備隊員織田氏の場合は、同8月15日横須賀工廠から軍用貨物列車に、海竜艇3隻と兵員6名と共に乗車、途中で終戦を知り、翌16日小名浜基地に着いた。基地建設の方は、設営隊が先遣隊として、既に設営を完了していた。一つ格納壕に2～3隻収納して、その壕内で整備をしていた、と同野々宮氏は証言する。

### 海竜艇量産後期型要目

全長17.3メートル、直径1.3メートル、全没排水量19.3メートル、速力、水上7.5ノット、水中10ノット、

機関いすゞ自動車DA60型ディーゼルエンジン100馬力、電動機九二式魚雷用モーター100馬力2基、特K型蓄電池104個、航続力水中10ノット/24時間、兵装45センチ二式魚雷2本、頭部炸薬600キロ、海竜艇には艇長1名、艇付1名の合計2名の搭乗である。

「海龍」後期型一般配置図



**宮崎部隊略歴** 部隊の戦闘参加はなかった。同野々宮氏は、終戦時、海竜艇は9隻あったと思うので、前記織田氏たちの同8月16日3艇貨物輸送小名浜基地着で、配備計画の12隻は揃ったと思うと述べている。同8月14日～15日に常磐沖を米軍艦隊通過の時、同野々宮グループはある温泉旅館で飲食をしていたところ、緊急呼び出しで、ただちに基地に戻り、出撃用意の態勢をとっていたが、結局、解除となったことは震洋隊と同じであった。同8月15日の「玉音放送」は、格納壕の前に総員集合して聴いたが、よく判らないようだった。夜になって、第七特攻戦隊本部より、隊員は軽挙妄動を慎め、との速電が入った。同8月16日朝方、突然海竜艇一隻が大爆発し、大きな水柱が上がり、港内の全ての船が転覆して大騒ぎとなった。この爆発した海竜艇には搭乗員伊藤侑義一曹と同佐々木和夫一曹が同乗していた。伊藤一曹は家族が空襲で全員死亡してしまったことを知り悲観していた。これに同情した佐々木一層と2人で自爆したのが事の真相である。同日昼頃から翌日にかけて、陸軍郡山練習飛行場から「赤トンボ」練習機が飛来、徹底抗戦のビラを多数散布した。終戦の詔勅で動揺していた下士官搭乗員の感情を刺激して、一部不穏な動きが察せられたので、前記野々宮少尉は彼らを三崎台地に集合させ、「我々は今、軽挙妄動を絶対慎まなければならない。我々の徹底抗戦は、米軍を上陸させて、陸戦で闘うべきだ」と諭したのが功を奏して、彼らは落ち着きを取り戻した。夜になって、野々宮氏等の高津宿舎に、第十七突撃隊吉留善之助司令や宮崎部隊長が訪れて、野々宮氏の考えに同意を示した。

同野々宮氏は、前記伊藤一曹と佐々木一曹、それに宮崎部隊長の嶽父の3基の位牌を預かって1945年8月29日、早めに復員し、総員は9月1日の復員であった。

## まとめ

主として、証言、現地調査、震洋会編文献と海軍公文書を基に、茨城、福島、海軍特攻隊と同基地についての調査報告を記してみた。結論として、福島いわき市小名浜に、第138震洋隊基地と第12海竜隊基地が実在したこと。茨城県北茨城市平潟には、第141震洋隊基地がほぼ完成して、部隊も移動しつつあったことが、概ね解明できたと考える。そして、これら3つの特攻隊は1つの突撃隊の下にあったことも、海軍公文書で明らかになった。このようにして、茨城、福島、海軍特攻隊と海竜隊日本海軍における編成配属は、連合艦隊（大将豊田副武司令長官）—横須賀鎮守府（中将戸塚道太郎長官）—第七特攻戦隊（大佐杉浦矩郎司令官）—第十七突撃隊（大佐吉留善之助司令）＝第138震洋隊（中尉渡辺剛州部隊長）、第141震洋隊（中尉三講正美部隊長）、第12海竜隊（中尉宮崎襄部隊長）となる。さて、前記『青春の絆』の編集者藤本達男氏は「戦争は嫌だ、戦争はサタンだ、戦争ほど凄惨なものはない」と断言しておられる。思えば、未だ十分に政治や社会、そしてなによりも戦争の実情を知り得なかった純真無垢な少年兵の祖国＝家族愛や「東亜永遠の平和」（開戦の詔勅）の為の聖戦に殉じようとする正義感を最大限に利用し、現人神天皇をいただく神国日本には、必ず天佑神助の神風が吹くと信じ込ませた皇国日本の指導者の責任は拭い難い重大なものと考えざるを得ない。震洋隊の場合、特攻ボートの講習が終了すると、特攻術章が付与され、特別の階級昇進があり、エリート意識も植え付けられた。そして入隊すると、連合艦隊司令長官から護国刀が授与されたのである。さらに部隊配属後も、特別の食事、遊郭の切符、給与

など特別待遇がとられ、整備隊員や基地隊員とは隔絶させられた。前記荒井志郎氏は「特攻術とは、小をもって大を斃す必死必殺の術」を意味し、「一度出撃すれば生還することはありません、片道の進軍だ」と記しておられる。このようにして、祖国の英霊となって靖国神社に祀られることが期待されたのである。その為に、日本における伝統的文化的なもの、物質的精神的なものが、その道具として利用され、また美辞麗句でかざられた。特攻精神は、終戦間際まで拡大されて、組織的体制的特攻戦法が「死ぬための出撃」となり、捕虜になることを認めない戦陣訓の「玉砕戦法」が進められた。さらに、敗戦を認めない「一億総玉砕」の戦争観は、近代戦争史上異例である。この特殊日本形特攻思想を解明することが、私の次の課題であると考えている。21世紀初頭にあたり、テロ報復アフガン戦争、パレスチナ紛争など「戦争」は続いている。日本は国会において、「平和憲法」の「改正」が準備されている。私たちは、日本国憲法第九条の非武装平和主義と前文の国際協調主義を、今こそ世界に広め、戦争のない世界を一日も早く構築しなければならないと考える。

#### 注) の参考文献、証言

- 1) 『写真集 人間兵器震洋特別攻撃隊』上下巻、震洋会編、監修荒井志郎、図書刊行会、平成2年
- 2) 『青春の絆』いざや会記念号、元第138震洋特別攻撃隊渡辺部隊、編集藤本達男、発行いざや会、平成9年
- 3) 1)の上巻、『終戦史録』外務省編、昭和27年
- 4) 「資料編」『日本特攻艇戦史』、木俣滋郎著、光人社、1998年
- 5) 1)の上巻

- 6) 『海竜と回天』編集長渡辺義之、学習研究社、2002年、前記『終戦史録』
- 7) 1)の下巻、軍極秘印「震洋隊兵器格納現況」、軍機印「水上水中特攻兵力展開現況」(二〇、七、二七、現在展開発令済ノモノ)
- 8) 1)の下巻
- 9) 小川博道、根本博、高橋英雄、日置浩太氏など平潟住民多数証言
  - 2 茨城、福島の震洋隊の②の基地進出の証言、(イ)第138震洋隊部隊長渡辺剛州氏、旅館静海亭主鷹岡忍氏(平潟)、(ロ)前記倉本、同小川、根本、高橋、日置氏など。(ニ)同小川氏。(ホ)同小川、根本、高橋氏など多数、郷土史家鈴木道夫氏(九面)
- 10) 前記野々宮氏提供資料「第12海竜隊搭乗士官名簿」
- 11) 軍極秘印、機密第101644番電「第七乃至第十四海竜隊ノ編成並ニ配属左ノ通定メラル」「海竜展開計画」昭和二十年七月十日発電済

## 基本文献

### 1 アジア太平洋戦争

『太平洋戦争』第二版、家永三郎著、岩波書店1987年

『十五年戦争小史』江口圭一著、青木書店、1990年

『大東亜共栄圏の思想』栄沢幸二著、講談社現代新書1995年

### 2 震洋隊

『還らざる特攻艇』益田善雄著、露出版社、昭和62年

『つらい真実』小沢郁郎著、同成社、1995年

『特攻の真実』深堀道義著、原書房、2001年

『日本特攻艇戦史』木俣滋郎著、光人社、1998年

## 3 海竜隊

『特殊潜航艇』佐野大和著、図書出版、昭和50年

『日本潜水艦戦史』木俣滋郎著、図書出版、1993年

『海竜と回天』編集長渡辺義之、学習研究社、2002年

**丹 賢 一**

北茨城市に1940年生まれる。

北茨城平和の会、歴史学研究会、日本科学者会議、日本民主法律家協会などに所属。

主論文「日本国憲法第九条解釈論の批判的考察—橋本公  
亘教授（中央大学）の憲法変遷論を中心に—」